

『無量寿経論』 写本テキストをめぐる

辻本 俊郎

- 0、はじめに
- 一、『無量寿経論』諸テキストについて
- 二、『無量寿経論』テキストの系統について
- 三、『無量寿経論』古写本とその他の『無量寿経論』テキスト
- 四、『無量寿経論』の引用文を参照して
- 五、結論

キーワード：世親、『無量寿経論』、写本、大蔵経、『論註』

0、はじめに

われわれ仏教研究者は、従来、漢訳仏典を扱う場合、『大正新脩大蔵経』を基本テキストとして利用してきた。しかしながら、近年、平安時代や鎌倉時代の仏教写本の研究が進むにつれ、その中の多くのテキストは、奈良時代の転写本であることが判明し、したがって、「高麗大蔵経」などと比して、隋時代や唐時代の仏教資料に近い関係であることが、明らかになりつつあり、写本としての仏典の研究が見直されようとしているのである。写本仏典は、少なからず誤写などを有しているが、最近の研究によれば、厳格な文字の確定がなされた刊本大蔵経よりも古い

形態をとどめている場合も多いようである¹。

果たして、『無量寿経論』の写本にも同じことが言えるのだろうか。Vasubandhu（世親、天親とも）（西暦五世紀頃）によって著された『無量寿経論』はサンスクリット語原典も現存せず、チベット語訳も存在しない。ただ、漢訳としてBodhiruci（菩提流支）訳しか存在しない。それだけに写本や「大蔵経」などに入蔵された『無量寿経論』テキストを対比させ、どのテキストを採るべきか十分な検討が必要である。本小論では、『無量寿経論』の写本が、刊本大蔵経などと比して、古形態を有しているかどうか、という点に絞って考察を加えたい。ひいては、近い将来に発表したいと考えている、『無量寿経論』批判的校訂本の作成に関わるのであるが、いずれのテキストが底本的役割を果たすのか、という問題も併せて解決したい²。

一、『無量寿経論』諸テキストについて

筆者の手元にある「大蔵経」所収の『無量寿経論』は、次の十三本である。

- ①宋・東禪寺版（一〇九三）

¹ 落合俊典〔二〇〇九〕によると、「日本の古写経の中、平安写経の大半は奈良写経の転写本を底本として書写されている。宋版が陸続と伝来輸入された鎌倉時代にあっても、写本一切経の多くは奈良写経の転写本に基づいているようである。もっとも、南北朝から室町時代に下ると底本が刊本一切経というケースが多くなり、奈良写経の姿は見えなくなるが、我々は平安・鎌

倉写経の重要性を見逃してきたと指摘できる段階に達していると言っても過言ではない」とする。

² 「浄土教の総合的研究」研究班編〔一九九九〕では、宋・東禪寺版を底本として、岸一英、筆者の2名が校異本を作成し、発表した。それは、完本として最古のテキストだったことによるのであって、批判的校訂本というまでには至っていない。

東禪寺版は私版として刻され、開版の場所は福州東禪等覺院である。折本の形式で一面六行であり、一行は一七字である。筆者の手元にあるのは京都・東寺所蔵の写真版である。『無量寿経論』は「堂」の函に入蔵されている。

②宋・開元寺版（一一一二～一一五一）

開元寺版も私版として刻され、開版の場所は福州開元寺である。これも折本の形式で一面六行であり、一行は一七字である。筆者の手元にあるのは京都・知恩院所蔵の写真版である。『無量寿経論』は「堂」の函に入蔵されている。

③宋・思溪版（一一三三頃）

思溪版も私版として刻され、開版の場所は円覚禪院である。これも折本の形式で一面六行であり、一行は一七字である。筆者の手元にあるのは東京・増上寺所蔵のコピーである。『論』は「堂」の函に入蔵されている。

④宋・磧砂版（一二三八～一三一〇）

磧砂版も私版として刻され、開版の場所は磧砂延聖院である。これも折本の形式で一面六行であり、一行は一七字である。筆者の手元にあるのは台湾新文豐出版影印版第一五卷所収のものである。『無量寿経論』は「堂」の函に入蔵されている。

⑤宋・杭州版（一二七八～一二九〇）

杭州版も私版として刻され、普寧蔵とも呼ばれる。開版の場所は杭州南山大普寧寺である。これも折本の形式で一面六行であり、一行は一七字である。筆者の手元にあるのは東京・増上寺所蔵のコピーである。『無量寿経論』は「堂」の函に入蔵されている。

⑥高麗再雕版（一二三六～一二九〇）

初雕本が焼失し、高麗再雕版は勅版として刻され、その版木は海印寺にある。高麗再雕版は方冊の形式を採っている。一面一一行であり、一行は四字である。『無量寿経論』は「虚」の函に入蔵されている。筆者の手元にあるのは東京・増上寺所蔵のコピーである。

⑦明・永楽北蔵（一四二一～一四四〇）

折本の形式で、一面六行であり、一行は一七字である。『無量寿経論』は『転法輪経優波提舍』との二論合巻で千字文は「顛八」である。

⑧明・洪武南蔵（一三七二～一四一四）

折本の形式で、一面六行であり、一行は一七字である。最終的に永楽一二年（一四一四）までに完成。「初刻南蔵」ともいわれており、『無量寿経論』は『転法輪経優波提舍』との二論合巻で千字文は「堂十」である。磧砂版を元に校正され、完成後はその版木が永楽南蔵に転用された。

⑨清・龍蔵（乾隆版大蔵経）（一七三三～一七三八）

折本の形式で、一面六行であり、一行は一七字である。『無量寿経論』は『転法輪経優波提舍』との二論合巻で千字文は「顛」である。

⑩中華民国・頻伽大蔵経（一九一一～一九一四）

活字本である。底本は『大日本校訂大蔵経』であり、いわゆる日本からの逆輸入である。

⑪中華大蔵経（一九八四～）

『無量寿経論』については高麗再雕版の影印である。したがって、「虚」の函に入蔵されている。対校本としては房山石経、思溪版、磧砂版、杭州版、洪武南蔵、龍蔵である。

⑫大日本統蔵経（正統蔵経）（一九〇五～一九一二）

活字本である。底本は諸種刊本、写本であり、出自が明らかでないものが多い。また、原稿となった本は京都大学附属図書館に所蔵されている。

⑬大正新脩大蔵経（一九二四～一九三四）

『無量寿経論』は二六巻に所収。底本は高麗再雕版で、対校本は思溪版、杭州版、嘉興大蔵経、東禪寺版、開元寺版、正倉院聖語蔵写本などである。洋装本である。

筆者の手元にある「石刻本」『無量寿経論』は以下の二本である³。

①中国・房山雷音洞（隋末唐初（六二〇前後））。

このテキストは大蔵経に比して成立年代から見て最も重要なテキストの一つである。ただ、残念なことに『無量寿経論』全体ではなく、「願生偈」のみ刻されているのである。また、この写真版が塚本善隆博士によって紹介され、大正新脩大蔵経『無量寿経論』と比較し、その異同を明らかにされている（塚本善隆〔一九三五〕）。

筆者もかつて房山雷音洞『無量寿経論』と東禅寺版、高麗再雕版、『論註』に引用される『無量寿経論』とを比較し、検討した結果、塚本善隆博士の指摘する以外にも異同が存することが判明し、それらを明らかにし、さらに房山雷音洞『無量寿経論』は高麗再雕版ではなく、東禅寺版に近いのではないかと結論を得た（拙稿〔一九九九〕）。なお、このテキストは一行が三〇字である。現在、この拓本が京都大学人文科学研究所に保管されている。拓本の大きさは縦六九・六センチメートル、横七五・二センチメートルである。また、一マスの大きさは縦二・三センチメートル、横二センチメートルである。

②中国・房山雲居寺南塔地下（遼（九一六～一一二五）時代）

一行基本的には一七字であるが、一八字の行も存する。「習」に収められている。契丹版大蔵経を底本にしていると言われている。『房山石刻（金遼刻）』（中国佛教協会編）第一一巻に収められている。

筆者の手元にある「写本」『無量寿経論』は以下の五本である。

①正倉院聖語蔵所蔵（平安時代中期）

この写本は、一行一五字である。また、従来は奈良時代のものとされてきたが、京都・佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班（平成七年度～平成九年度）の安達俊英研究員の調査によって平安中期のものであることが判明した。同研究班によって、『無量寿経論』巻頭巻末の写真のコピーが入手された⁴。

②稲藺山長福寺「七寺一切経」（承安五年（一一七五）～治承四年（一一八〇））

この写本は卷子本であり、外題は「無量寿経論一卷」となっている。全体一筆であり、訓点はない。一行につき一五字から二〇字となっている。奥書は「一校了 栄俊」となっている。行取りは流布本と大きく異なっている⁵。

③河内長野市真言宗天野山金剛寺「金剛寺一切経」（平安時代後期（一一世紀）から鎌倉時代（一三世紀）にかけて書写）

この写本の写真版のコピーは、畏友齊藤隆信氏の好意により筆者に送られた。「願生偈」では、一行四句で、改行箇所も見られる。「長行」では、一行につき、一六字から二〇字で、その幅は大きい。ほとんどの行は、十七、十八字である。これと「七寺」のものとは比較すると、誤字、脱字などは非常に少ないようである。

④鎌倉光明寺所蔵寂恵（鎌倉時代末）書写本

この写本は粘帖装、半葉六行で一行一七字であり、願生偈、長行ともに改行箇所は見られない。本文は全体一筆で、訓点あり。このテキストの写真版が京都・佛教大学図書館に所蔵されている。また、筆者の研究で、後述する『論註』に引用された『無量寿経論』本文とおおよそ一致することが明らかとなった⁶。

³ 中国・北響堂山刻経洞（北齊（五五〇～五七七）時代）にも刻された『無量寿経論』テキストがあったという。このテキストは願生偈の部分のみ刻されたいが、常盤大定の報告（常盤大定〔一九三八〕『支那佛教史蹟踏査記』）によるとすでに風化しているとある。したがって、現存しないということになる。

⁴ 筆者の手元にあるものとしては、巻頭としては最初から「能令速満足 功德大寶海」までの句であり、巻末としては「生彼国故得生安樂世界」云々からである。

⁵ 七寺所蔵『無量寿経論』写本は華頂短期大学〔一九九七〕に巻頭部分が紹介されている。

⁶ 詳細については前掲拙稿〔一九九九〕を参照されたい。

⑤京都市常楽寺所蔵存覚（一二九〇～一三七三）書写本

この写本は鎌倉光明寺所蔵寂恵（鎌倉時代末）書写本と同様、粘帖装、半葉六行で一行七字であり、願生偈、長行ともに改行箇所は見られない。本文は全体一筆で、訓点あり。外題は浄土論 存覚師御筆、墨付十七丁とある。ただし、整理番号が二一まで付されているが、残念なことに整理番号一六以降、混乱し、完本ではない。また、この書写本も④寂恵書写本と同じく『論註』に引用された『無量寿経論』本文とおおよそ一致することが明らかとなった⁷。

『論註』に引用された『無量寿経論』としての存在

①親鸞聖人加点本（建長八年、一二五六）

このテキストは『親鸞聖人真蹟集成』第七巻（法蔵館、一九七三）に所収。『無量寿経論』テキストそのものではないが、言うまでもなく、『論註』には『無量寿経論』本文全て引用されている。しかしながら、流布本などと字句の異同などが甚だしいことが明らかになった（前掲拙稿〔一九九九〕を参照されたい）。一次資料ではないが、曇鸞が『無量寿経論』訳者である菩提流支（Bodhiruci）から直接授かった『無量寿経論』は果たしてどのようなテキストだったのか、という研究課題も当然浮かび上がってくる⁸。

また、親鸞聖人加点本は『浄土論註校異』（〔一九二五〕真宗勸学寮編）の底本となっている。

②京都・佛教大学図書館所蔵伝覚如（一二七〇～一三五五）書写本『論註』

このテキストについて詳細は以前発表し

た⁹。また、佛教大学総合研究所代表香川孝雄編〔一九九九〕における研究会報告平成七年度の中で、国枝利久、岸一英が鑑定した結果、「その書体から見て、覚如の書ではなく、室町時代の写本ではないか」と結論づけている。

流布本としての『論』テキスト

①『浄土宗全書』一卷

義山版本を底本としている。活字版である。改行箇所はない。浄土宗の依用本である。

②浄土真宗聖典編纂委員会編『浄土真宗聖典七祖編（原典版）』

このテキストの底本は兵庫県毫撰寺所蔵永享九年（一四三七）刊本であり、武内紹晃〔一九九三〕「世親一唯識思想と浄土論」『浄土仏教の思想』第三巻（講談社）の中でその巻頭部分が口絵として紹介されている。対校本としては、「大蔵経」所収のものとして高麗再雕版、宋・磧砂版、元・杭州版、明・万曆版、写本としては、前述の常楽寺所蔵存覚書写本、『七祖聖教』である。

二、『無量寿経論』テキストの系統について

筆者は、以前に「金剛寺一切経」を除く、これらの『無量寿経論』テキストに対して、字句の異同、改行箇所などを精査し、それらの系統を次のように結論づけた（辻本〔一九九九〕、〔二〇〇六〕）。大きく分けて、A系統が宋元明の三本系、B系統が高麗系、C系統が『無量寿経論註』に引用された『無量寿経論』である。これをさらに細かく分けると、次のようになるのである。

⁷ 詳細については前掲拙稿〔一九九九〕を参照されたい。

⁸ 『無量寿経論』と菩提流支（Bodhiruci）との関係については、辻本〔二〇一〇①〕を参照されたい。また、この問題については岸一英〔一九九九〕に詳しい。ここでは、『無量寿経論』に対する従来の説の確認、菩

提流支との関係、曇鸞と『無量寿経論』との関係など『論』テキストの諸問題についての紹介がある。

⁹ 拙稿〔二〇〇五〕を参照されたい。そこでは書誌概略、内容の検討とその特徴について述べた。

- ・ A 1 系統
宋版・「東禅寺版」所収『無量寿経論』
宋版・「開元寺版」所収『無量寿経論』
房山雷音洞石刻本（「願生偈」のみ）
- ・ A 2 系統
宋版・「思溪版」所収『無量寿経論』
- ・ A 3 系統
宋版・「磧砂版」所収『無量寿経論』
元版・「杭州版」所収『無量寿経論』
明版・「洪武南蔵」所収『無量寿経論』
- ・ A 4 系統
明版・「永樂北蔵」所収『無量寿経論』
明版・「嘉興蔵」所収『無量寿経論』
清版・「龍蔵」所収『無量寿経論』
「黄檗大蔵經」所収『無量寿経論』
- ・ B 1 系統
高麗版・「高麗再雕版」所収『無量寿経論』
房山雲居寺石刻本所収『無量寿経論』
「中華大蔵經」所収『無量寿経論』
「大正新脩大蔵經」經所収『無量寿経論』
- ・ B 2 系統
「大日本校訂大蔵經」所収『無量寿経論』
中華民國・「頻伽蔵」所収『無量寿経論』
- ・ C 系統
親鸞加点本『無量寿経論註』所引本
鎌倉光明寺所蔵寂恵書写本
京都常樂寺所蔵存覚書写本
『浄土宗全書』第一卷所収『無量寿経論』（義山版を底本とする）
『浄土真宗聖典七祖篇（原典版）』所収『無量寿経論』（兵庫県毫摂寺所蔵永享九年本を底本とする）
『真宗聖教全書』第一卷（三経七祖部）所収『無量寿経論』（底本は京都常樂寺所蔵存覚書写本）
果たして、『無量寿経論』の場合、比較的古い写本テキストである正倉院本、七寺本、金剛

寺本がこれらのテキストに比して、古形態を有しているのだろうか。これについて次節で検討する。

三、『無量寿経論』古写本とその他の『無量寿経論』テキスト

まず、①題名より検討したい¹⁰。正倉院本、金剛寺本、七寺本の三本の写本では「無量壽経論」となっており、これと同じ題名のテキストは全くない。したがって、「無量壽経論」というのは写本独特の題名であることが明白である。また、光明寺本、常樂寺本の二本の写本は、『論註』系統であるので、親鸞加点本と同じ「無量寿経優婆提舍願生偈」となっている。宋元明版系統のテキストでは、「無量壽優波提舍經」、もしくは「無量壽經優波提舍」となっており、高麗版系統では、「無量壽經優波提舍願生偈」となっている。すなわち、写本テキストを支持するものはここでは存しないのである。

次に②訳者名である。『無量寿経論』の訳者は、Bodhiruci（菩提流〔留〕支）であるが、正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本は、訳者名を記していない。この特徴は、隋末唐初に刻まれたとされる石刻本、また、『無量寿経論』に註釈と施した曇鸞『論註』と合致するのである。ということは、訳者名の有無からすれば、写本テキストは、比較的古い形態を有したテキストではないかと推察できよう。しかしながら、問題は決してそのように簡単ではないのである。

というのも、正倉院本、金剛寺本、七寺本には、③サブタイトルを有する。すなわち、「優波提舍願生偈」である。しかし、隋末唐初の石刻本も『論註』の系統、すなわち、親鸞加点本もサブタイトルは有しないのである。また、高麗版系統にもサブタイトルは存しないのである。

以上のように、題名では正倉院本、金剛寺本、〔二〇一〇〕、大竹〔二〇一一〕を参照されたい。

¹⁰『無量寿経論』の題名の詳細については、辻本

七寺本の写本テキストは、他のテキストと一致せず、訳者名としては、隋末唐初の石刻本と一致し、サブタイトルとしては、宋元明版系統を支持しているのである。つまり、わずか①題名、②訳者名、③サブタイトルを採り上げだけでも、このように混乱を来しているのである。

それでは、内容の方はどうであろうか。まずは、「願生偈」の部分より見ていくことにする。

第十一偈に④「梵聲語深遠 微妙聞十方 正覺阿彌陀 法王善住持」（大正二六卷二三一頁上）とあるが、正倉院本、金剛寺本、七寺本は、「梵聲悟深遠」となっている。「語」となっているのは、高麗版系統であって、宋元明版系統、『論註』系統は、「悟」となっており、ここでは、宋元明版系統、『論註』系統を支持しているのである。すなわち、写本テキストは、宋元明版、及び『論註』系統を支持しているのである。

また、第十五偈上の句では、⑤「故我願往生阿彌陀佛國」（大正二六卷二三一頁上）とあるが、正倉院本、金剛寺本、七寺本でも、「故我願往生 阿彌陀佛國」と同様である。しかも、高麗版系統はこの句をもって改行しているのであるが、正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本テキストも改行しているのである。それに対して宋元明版系統では「故我願往生 阿彌陀佛國」となっているが、改行はしていない。『論註』系統にいたっては、「是故願生彼 阿彌陀佛國」となっており、字句の異同が認められるのである。したがって、ここでは、写本テキストは高麗版系統を支持しているのである。

「願生偈」の締めくくりの文として⑥「無量壽修多羅章句我以偈總說竟」（大正二六卷二三一頁中）とある。金剛寺本、七寺本の写本テキストも「無（无）量壽修多羅章句我以偈總說竟」となっている。これに対して、宋元明版系統では「無量壽修多羅章句我以偈頌總說竟」となっているし、『論註』系統では、「無量壽修多羅章句我以偈誦總說竟」となっており、こ

でも写本テキストは、前述した第十五偈上の句と同様、高麗版系統を支持しているのである。

それでは、長行ではどのようなになっているのだろうか。

長行の第3文目に⑦「觀安樂世界見阿彌陀佛願生彼國土故」（大正二六卷二三一頁中）とある。金剛寺本、七寺本では、「示現觀安樂世界見阿彌陀佛願生彼國土故」となっており、これらの写本を支持しているのは、『論註』系統である。宋元明版、高麗版系統では、「示現」の字句は見られない。

第6文目であるが、⑧「若善男子善女人修五念門成就者畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛」（大正二六卷二三一頁中）とある。金剛寺本、七寺本の写本もこれを支持しているのであるが、『論註』系統では、「若善男子善女人修五念門成就行畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛」となっている。つまり、写本は宋元明版、高麗版といった大蔵經系統を支持しているのである。

⑨「身業禮拜阿彌陀如來應正遍知」（大正二六卷二三一頁中）とあるが、金剛寺本、七寺本では、同様になっているが、宋元明版系統のみ「身業禮拜阿彌陀佛如來應正遍知」となっており、すなわち、ここでは、写本テキストは、高麗版系統、あるいは、『論註』系統を支持しているのである。

また、⑩金剛寺本、七寺本では「一者觀察彼佛國土功德莊嚴」（大正二六卷二三一頁中）とあるが、『論註』系統のみ「一者觀察彼佛國土莊嚴功德」となっており、ここでは、宋元明版、高麗版系統を支持しているのである。『無量壽經論』における「功德莊嚴」となっているところは、他にも多数見受けられるが、いずれもこのようになっているのである。

⑪金剛寺本、七寺本では、「不捨一切苦惱衆生心常作願迴向爲首成就大悲心故」（大正二六卷二三一頁中）とあるが、ここでは、高麗版系統を支持している。『論註』系統では、「不捨一

切苦惱衆生心常作願迴向爲首得成就大悲心故」
となっているし、宋元明版系統に至っては「於
彼觀察一切世間苦惱衆生同願生彼安樂國土願心
所有功德善根以巧方便作願迴向攝取衆生不捨一
切世間故」となっているのである。

これ以上、煩雑さを恐れて記さないが、上記
のことを簡単にまとめると④宋元明版・『論註』、
⑤高麗版系統、⑥高麗版系統、⑦『論註』系統、
⑧宋元明版・高麗版系統、⑨高麗版系統・『論註』
系統、⑩宋元明版・高麗版系統、⑪高麗版系統
を支持し、「長行」に至っても、「願生偈」同様
に正倉院本、金剛寺本、七寺本といった写本テ
キストは、このようにある時は、宋元明版系統、
また、ある時は高麗版系統、あるいは、『論註』
系統を支持しているであって、混乱を来たして
いるのである。

そこで、次節では、比較的古い時代、すなわ
ち、唐時代の『無量寿経論』引用文を参照する
ことによって、『無量寿経論』の写本が、刊本
大蔵経と比して、古形態を有しているかどうか、
一指針とする。

四、『無量寿経論』の引用文を参照して

『無量寿経論』の漢訳が、永安二年（西暦
五二九年）、あるいは普泰元年（西暦五三一年）
のBodhiruci（菩提流支）によってなされた¹¹が、
わずか二年の差であるが、いずれの説を採って
も六世紀中ばである。ということは、訳出後の
一〇〇年前後までの早い時期に、すなわち、七
世紀までに『無量寿経論』本文を引用した書物
があれば、それを参考に『無量寿経論』の最初
期のテキストの形態が推察できるのではないか
と考えられる。そして、七世紀までにそれを引
用した書物は存在するのである。すなわち、隋・

浄影寺慧遠（西暦五二三年～五九二年）、智顗（西
暦五三八年～五九七年）『浄土十疑論』、唐・智
儼（西暦六〇二年～六六八年）『華嚴経内章門
等雜孔目』、唐・迦才『浄土論』（西暦六四八年）、
唐・道世『法苑珠林』（西暦六六八年）、新羅・
元曉（西暦六一七年～六八六年）『阿弥陀経疏』、
唐・竜興（西暦六五五年～七一二年？）『観無
量壽経記』、新羅・義寂（西暦七世紀）『無量壽
経述義記』などである。

前節で見た①「若善男子善女人修五念門成就
者畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛」（大正二六
卷二三一頁中）は、金剛寺本、七寺本ではその
ようになっているが、『論註』系統では、「若善
男子善女人修五念門成就行畢竟得生安樂國土見
彼阿彌陀佛」となっている。前者、すなわち、
金剛寺本、七寺本は宋元明版系統、高麗版系統
などの大蔵経系統を支持しているのである。

実は、この文を唐・迦才はその著『浄土論』
に引用しているのである。そこでは、「若善男
子善女人修五念門行成就者畢竟得生安樂國土見
彼阿彌陀佛」となっており、両者、すなわち、
金剛寺本、七寺本の写本テキストや大蔵経系統、
そして、『論註』系統の特徴を具えているので
ある。また、唐・道世も『法苑珠林』において
は、「若善男子善女人修五念成就者畢竟得生安
樂國土見彼阿彌陀佛」と引用しており、金剛寺
本、七寺本の写本テキストや大蔵経系統を支持
しているのである¹²。したがって、この「若善
男子善女人修五念門成就者畢竟得生安樂國土見
彼阿彌陀佛」（大正二六卷二三一頁中）は、強
いて言えば、金剛寺本、七寺本の写本テキスト
や大蔵経系統が『無量寿経論』が伝播した最初
期の形態を留めているのではないかと考えら
れる。しかしながら、『無量寿経論』の引用文
から見ても、前節同様に問題は決して簡単に解

¹¹ 『無量寿経論』の訳出年代については、辻本〔二〇一一
①〕を参照されたい。

¹² 新羅・元曉偽撰『遊心安樂道』は、「若人修五念門成

就者畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛」となっており、
【金】【七】を支持している。

決できそうにない。

というのは、②「身業礼拜阿弥陀如来應正遍知」（大正二六卷二三一中）とあるが、宋元明版系統では「身業礼拜阿弥陀如来佛應正遍知」、金剛寺本、七寺本の写本テキストでは「身業礼拜阿弥陀如来應正遍知」となっており、高麗版系統を支持しているのである。この文を唐・智儼が『華嚴經内章門等雜孔目』の中で、引用しているのである。すなわち、「身業礼拜阿弥陀如来應正遍知」とあり、高麗版系統や金剛寺本、七寺本の写本テキストを支持していることが明らかである。

また、宋元明版・高麗版系統、金剛寺本、七寺本などの写本テキストは、③「一者觀察彼佛國功德莊嚴」（大正二六卷二三一頁中）となっている文があるが、『論註』系統では、「一者觀察彼佛國莊嚴功德」となっている。これに対して、淨影寺慧遠『観無量壽經疏』では「一觀彼佛國功德莊嚴」となっており、金剛寺本、七寺本の写本テキストや宋元明版・高麗版系統の大蔵經テキストを支持している。しかしながら、新羅・義寂『無量壽經述義記』には、「一者觀察彼仏土莊嚴功德」とあり、『論註』系統を支持しているのである。淨影寺慧遠は、六世紀、義寂は七世紀に生きた人物であるので、『無量壽經論』が六世紀半ばに漢訳されていることを考えれば、『無量壽經論』の翻訳当時は、「一者觀察彼佛國功德莊嚴」、すなわち、宋元明版・高麗版系統、金剛寺本、七寺本などの写本テキストが古形態を留めているのではないかと考えられよう。

ところが、④宋元明版・高麗版系統、金剛寺本、七寺本の写本テキストでは、「二者〔無〕量功德成就」（大正二六卷二三一頁中）となってい

る文があるが、『論註』系統では、「二者莊嚴〔無〕量功德成就」となっており、ここでも義寂『無量壽經述義記』は「二莊嚴量功德成就」となっており、『論註』系統を支持しているのである。

宋元明版系統では、⑤「光明功德成就者偈佛慧明淨日除世癡冥闇故」（大正二六卷二三一頁下）とあるが、高麗版系統や『論註』系統では、「〔莊嚴〕光明功德成就者偈佛慧明淨日除世癡闇冥故」となっている。金剛寺本、七寺本の写本テキストは後者を支持している。この文に関しては、曇鸞『略論安樂淨土義』、唐・竜興『観無量壽經記』の二書に引用されている。『安樂淨土義』では、「十者佛慧光明照除癡闇」となっており、明確ではないが高麗版系統や『論註』系統を支持しているようである。曇鸞は『無量壽經論』に註を施して『論註』を著しているのであるから、当然のことであろう。竜興『観無量壽經記』では「十光明功德如偈仏恵明淨日除世癡闇冥」となっており、これも高麗版系統や『論註』系統を支持している。したがって、ここでは、金剛寺本、七寺本の写本テキスト、高麗版系統や『論註』系統が古い形態を留めているのであろう。

また、⑥宋元明版系統、『論註』系統では、「一者無染清淨心以不爲自身求諸樂故」（大正二六卷二三二頁下）とある。これに対して、高麗版系統では「一者無染清淨心不以爲自身求諸樂故」となっている。金剛寺本、七寺本の写本テキストは、前者、すなわち、宋元明版系統・『論註』系統を支持している。この文は、古くは道綽『安樂集』、智顗『淨土十疑論』、義寂『無量壽經述義記』に引用されている。それらを見るに、『安樂集』では、「一者無染清淨心不爲自身求諸樂故」とあり¹³、『淨土十疑論』も「一者無染清淨心不

¹³ ただし、『安樂集』に関しては、岸一英〔一九九九〕が、「道綽は『淨土論』といいながらも『論註』の文を引用していることからして、その区別をなしていないことが知られる。『論註』の引用は中国において『安樂

集』が最初である。ただし、道綽は『論』だけを見て論じているわけではなく、『論註』のみを見て『安樂集』に引用していることに注意しなければならない」としている。

爲自身求諸樂故」とあり、『安樂集』と同じである。『無量壽經述義記』は、「一者無染清淨心以不爲自身求諸樂故」とあり、これらの引用文からすると、金剛寺本、七寺本の写本テキスト・宋元明版系統・『論註』系統を支持しているのである。

最後に⑦「出第五門者以大慈悲觀察一切苦惱衆生示應化身」（大正二六卷二三三頁上）云々という文を採り上げるが、これは宋元明版系統、『論註』系統である。これに対して高麗版系統では、「出第五門者大慈悲觀察一切苦惱衆生亦應化身」となっている。正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本テキストでは、「出第五門以大慈悲觀察一切苦惱衆生示應化身」となっている。この文を迦才『浄土論』、智儼『華嚴經内章門等雜孔目』ともに、「出第五門者以大慈悲觀察一切苦惱衆生示應化身」となっているので、ここでは、正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本テキスト・宋元明版系統・『論註』系統を支持していることが明らかである。

以上のように、『無量寿経論』本文の引用文より見てきたが、それぞれ引用文から見て古形態を支持しているものとしては、①写本テキスト・宋元明版・高麗版、②写本テキスト・高麗版系統、③写本テキスト・宋元明版・高麗版テキスト、④『論註』系統、⑤写本テキスト・高麗版・『論註』系統、⑥写本テキスト・宋元明版・『論註』系統、⑦写本テキスト・宋元明版・『論註』系統ということが明らかとなった。

ということは、④を除く、他の引用文は写本テキストを支持しており、したがって、正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本テキストが『無量寿経論』テキストの比較的古形態を有していると考えられ、ひいては、これらの写本テキストが『無量寿経論』批判的校訂本の底本的役割を果たすものであると考えられよう。

四、結論

以上、『無量寿経論』写本テキストに焦点を当てて、「大蔵経」テキストなどとの比較、あるいは『無量寿経論』が訳出されて、早い時期に引用された『無量寿経論』の文を手掛かりにして見てきた。それらをまとめると、

・正倉院本、金剛寺本、七寺本といった写本テキストは、ある時は、宋元明版系統、また、ある時は高麗版系統、あるいは、『論註』系統を支持しているのであって、果たして、どのテキストが底本的役割を果たすのかは判断できない。
・『無量寿経論』本文を引用した、漢訳された直後から西暦七世紀までの書物より見ると、正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本テキストが『無量寿経論』テキストの古形態を有しており、校訂本作成の際に底本的な役割を果たすものであると言えよう。それでは、正倉院本、金剛寺本、七寺本の写本テキストのいずれが良いのかという課題もあるが、現在筆者として正倉院本は巻頭巻末しか入手できていないので、金剛寺本か七寺本かということになる。書写年代からすると七寺本ということになるだろうが、七寺本は、金剛寺本に比べて誤写が多い¹⁴ので、現在のところ金剛寺本が底本として一番適切ではないか、と考えられるのである。

【参考文献】

- 恵谷隆戒〔一九七六〕『浄土教の新研究』山喜房仏書林
大須賀秀道〔一九二七〕「浄土論の訳本に就いて」大谷大学『仏教研究』第八巻第四号
大竹晋〔二〇一一〕新国訳大蔵経 釈経論部18『法華経論・無量寿経論他』大蔵出版
落合俊典〔二〇〇九〕「敦煌の仏典と奈良平安写経一分類学的考察一」高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店
梶浦 晋〔二〇〇二〕「近代における大蔵経の変遷」『常照—佛教大学図書館報』第五一号
佛教大学図書館
華頂短期大学編〔一九九七〕第81回大蔵会展覧目録『浄

¹⁴ 辻本〔二〇一一②〕を参照されたい。

土教と平安写経・七寺の世界』京都各宗学校連合会
 岸 一英〔一九九九〕「『無量寿経論』校異の意義」『無
 量寿経論校異』佛教大学総合研究所
 竺沙雅章〔二〇〇一①〕「大蔵経編纂」『仏教伝来』大谷
 大学
 竺沙雅章〔二〇〇一②〕『宋元佛教文化史研究』汲古書
 院
 柴田 泰〔一九九六〕「中国仏教における『浄土論』『浄
 土論註』の流伝と題名（一）」『印度哲学仏教学』第
 一一号
 柴田 泰〔一九九七〕「中国仏教における『浄土論』『浄
 土論註』の流伝と題名（二）」『印度哲学仏教学』第
 一二号
 「浄土教の総合的研究」研究班編〔一九九九〕『無量寿経
 論校異』佛教大学総合研究所
 真宗勧学寮編〔一九二五〕『浄土論註校異』真宗勧学寮
 真宗教学研究所編〔一九七二〕『浄土論註総索引』東本
 願寺出版部
 大蔵会編〔一九六四〕『大蔵経一成立と変遷』百華苑
 高瀬承厳〔一九一七〕「類本往生論に就きて」『仏書研究』
 第二九号
 塚本善隆〔一九三五〕「石刻山雲居寺と石刻大蔵経」『東
 方学報』京都第五冊副刊 東方文化学院京都研究所
 辻本俊郎〔一九九九〕「『無量寿経論』テキスト考」『無
 量寿経論校異』佛教大学総合研究所

辻本俊郎〔二〇〇〇〕「『無量寿経論』テキストの検討」『仏
 教学会紀要』第八号
 辻本俊郎〔二〇〇一〕「『無量寿経論』願生偈の文献学的
 考察」『仏教学会紀要』第九号
 辻本俊郎〔二〇〇四①〕「『無量寿経論』テキスト考（そ
 の2）—明版・清版を中心として—」『アジア文化
 学科年報』第七号
 辻本俊郎〔二〇〇四①〕「『無量寿経論』の流伝」『印度
 学仏教学研究』第五二号第一巻
 辻本俊郎〔二〇〇五〕、「伝覚如書写本『無量寿経論註』
 について」『アジア文化学科年報』第八号
 辻本俊郎〔二〇〇六〕「『無量寿経論』の諸本について」『ア
 ジア文化学科年報』第九号
 辻本俊郎〔二〇一〇〕「世親『無量寿経論』の題名をめぐっ
 て」『東アジア研究』第五四号
 辻本俊郎〔二〇一一①〕「『無量寿経論』とBodhiruci」『ア
 ジア学科年報』第四号
 辻本俊郎〔二〇一一②〕『無量寿経論』の諸本対照』私
 家版
 野沢佳美〔一九九八〕『明代大蔵経史の研究』汲古書院
 佛教大学総合研究所代表香川孝雄編〔一九九九〕『佛教
 大学総合研究所紀要別冊「浄土教の総合的研究」』
 松永知海〔二〇〇二〕「日本近世の大蔵経出版について」
 『常照—佛教大学図書館報』第五一号 佛教大学図
 書館